

佳作

## 大好きなひいおばあちゃんへ

福岡県 福岡市立三苫小学校五年 伊崎 心奏

「何年生になったの？」

「五年生になったよ。」

「へえ、大きくなったね。」

ついさっきも、この会話をした。私のそう祖母は今九十七才。にん知しようだ。今は、家から近くの老人ホームに入っている。

そう祖母にたのめば何でも出来る、そんな器用な人だった。料理上手でお正月は親族皆をおもてなししたり、お庭に野菜を作れば、丁ねいにお手入れするので、つやつやできれいな実がつく。お花もそう祖母がお手入れすると、すごく生き生きとあつという間に見えた。お洋服やバッグもささっとあつという間にプロ以上の物を作ってくれた。私のようち園バッグも手作りしてくれた。可愛いりんごマークのついた、うら地にがらのあるお気に入りのバッグだった。そんなそう祖母が、数年前から、

「もう大おばあちゃん、バカになってきよる。何も分からん。」

と言うようになってきたのだ。私は、そう祖母に限ってそんなわけがないと思い、初めは全く信じられなかったけれど、やはりじわじわと出来ない事が増えていき、同じ質問をくり返すようになっていった。赤ちゃんは、ちよつとずつ出来る事が増えていくくれるからうれしいけれど、にん知しようは、日に日に出来ない事が増えていくので、本人も周りもとても辛い。ネガティブな気持ちになってしまう。だけど、本人が一番、色々な事が分からなくなっていく事をとても不安に思っているように感じた。だから、私はそう祖母を不安にさせないようにいつも笑顔で楽しいふんい気である事を心がけている。

私が会いに行くと、うれしそうな顔をしておか子を開けてくれたり、飲み物を出してくれたり、ゼリーを開けてくれたり、一生けん命お世話をしてくれようとする。私もそう祖母のお世話をするのが好きだ。ゼリーを口に運んだり、手をつないで歩いたり、一緒に絵をかいたり、私がかいた絵を見て、

「いつも支えになっているよ。」

と言われてとてもうれしかった。この前は、昔の写真を持って行って、皆で話をした。すると、ついさ

っきの出来事はすぐにわすれてしまうのに、若い時の記憶はびっくりするほどせん明に覚えているので、周りの皆は目を丸くしておどろいたし、本人もとてもうれしそうにしていた。

そう祖母はいつも、

「なさないね。」

と言うけれど、そんな事ない。笑顔でいてくれるだけであれしい気持ちになる。これからも楽しい思い出をたくさん作っていこうね。またすぐ会いに行くからね。